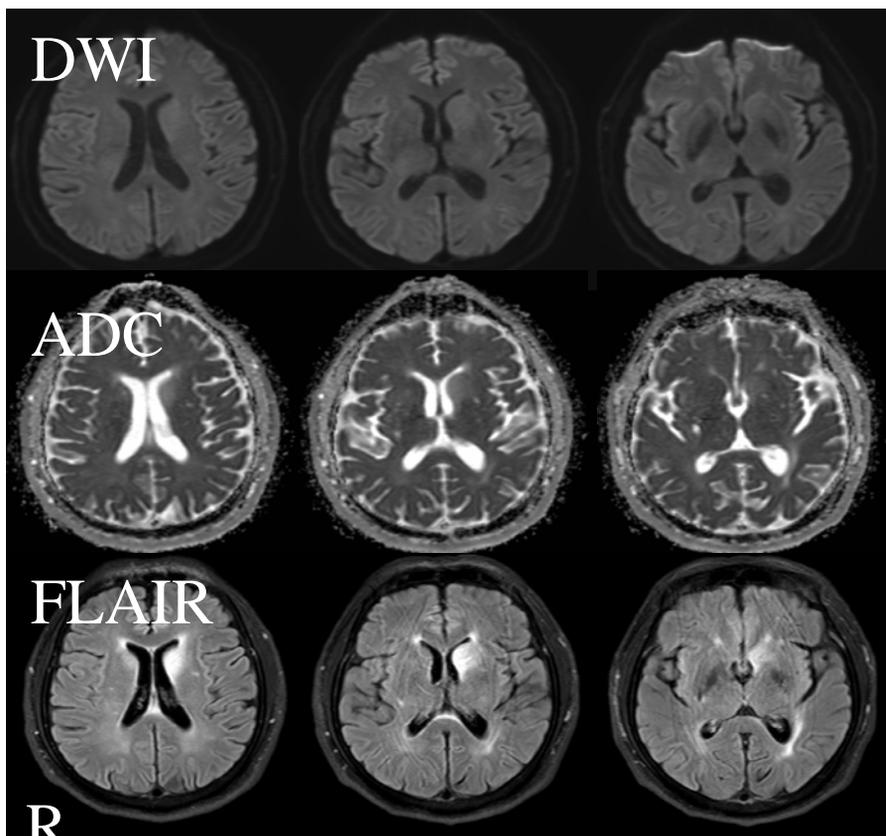


プリオン病における画像診断基準の有用性の検討

研究分担者: 徳島大学医歯薬学研究部 原田雅史

サーベイランスにおけるコンサルテーションにおけるMRI診断基準の有用性について後方視的に検討した。6例中2例が孤発性CJD、2例が遺伝性CJD、2例がプリオン病否定例であった。代表的な否定症例を下記に呈示する。



解説

1. FLAIRで左尾状核を主体とする明瞭な高信号病変。同病変は腫脹を伴い、尾状核周囲の白質(内包)にも及ぶ。
2. 同部位はDWIで信号変化は乏しくADCは上昇し、拡散亢進を示す。以上からはプリオン病は否定的であり、画像所見からは脳炎等の可能性が疑われた。
3. 病理で、血管周囲にリンパ球の集簇あり、B細胞や形質細胞が多い。追加免疫染色で、T細胞についてCD8細胞が優位で、傍腫瘍症候群の過去の病理報告に矛盾しないと判断された。